

## 留学生の記録断片

数年前、英国の大学の造船学科について調べたことがあった。グラスゴー大学、ストラスクライド大学(グラスゴーにある)、ニューカッスル大学、ロンドン大学、サウザンプトン大学の五校に造船学科がある。造船業の衰退した英国に五校も成り立っているのは不思議な気もするが、学生の半数以上は外国人留学生であり、卒業後は世界中の大学、海軍、船級協会、船会社、造船所へと出てゆくようである。依然として英国は教育大国である。

この中で一番古いグラスゴー大学は英国で最も早く工学教育が行われた所である。(一八四〇年(天保十一年)土木及び機械工学講座開設。また一八八三年(明治一六年)に造船学科も世界で最初に創設された)。

有馬朗人氏の説によると、明治の初期日本の大学が手本にしたのはオックスフォード、ケンブリッジ、ベルリン、パリ等の大学ではなく、グラスゴー大学であるという。つまり前記の大学はいづれも基本的には法、医、文、理それに神学から成り立っており、工、農が加わったのはごく最近である。一方グラスゴー大学はスコットランドの実学尊重の気風を反映して古くから工学教育を始めており、本学で学んだヘンリー・ダイヤーがお雇い外国人として来日し、工学寮の初代都検(学長)となり、工部大学校、工科大学、帝国大学へと、その思想が受け継がれたものであるという。グラスゴー大学は日本の大学の故郷といっても良いのかもしれない。

この大学の土木及び機械工学講座の外国人留学生第一号として一八七六年(明治九年)開成学校出身の谷口直貞(十七才)と増田礼作(十八才)が文部省から派遣されている。両人ともすばらしい成績をあげ二年後に学士号を取得している。この産業都市にある大学にはその後多くの人達が工学を学びに留学しているが、大学の記録には川崎の先達も載っている。一八九七年(明治三〇年)に海軍機関学校第一期生(明治二七年卒)の小田切延寿氏(二十二才)が入学し、二年間に物理学、機械工学、化学、応用数学(二番の成績)、造船学、機械工学実験、電気工学、高等物理学を受講した。彼は帰国後、海軍機関大佐となり活躍し、その後一九二八年から一九三五年(昭和十年)のあいだ川崎造船所の取締役を勤められた。小田切氏についてはこれ以上の情報はないが、面白い記録がある。この大学では一九〇一年(明治三十四年)に日本人の入試選択科目の第二外国語として独仏語の代わりに日本語を採用している。これは福沢三八(諭吉の三男)の強い希望を教授会が受け入れた結果であるという。また日本総領事の紹介で、当時ロンドンに留学中の東大英文科教授の夏目金之助(漱石)を試験官としている。この日本語入試は一九一四年(大正三年)まで続いたという。如何に多くの日本人が留学し評価されていたかを物語るものであろう。

さて所謂ロンドン大学とは単一の大学ではなく五十以上の大学や研究機関の連合組織であり、その起源は一八二〇年代(文政年間)に設立されたユニバーシティ・コレッジ(現在のユニバーシティ・コレッジ・ロンドン)である。当時存在したオックスフォード大学やケンブリッジ大学は英国国教会の信徒のみ入学を許された。それに対しユニバーシティ・コレッジは人種、性、信仰、政見の如何を問わず全ての人に開放された大学として設立された。その後他大学との連合体としてのロンドン大学が組織され、以後拡張して現在の大組織となったものである。

ユニバーシティ・コレッジ・ロンドンの裏庭を歩くと、黒い御影石の石碑に出会う。明治維新の前に本学を訪れ勉強した先人の記念碑である。碑には「一八六三年及び一八六五年にUCLを訪れ、帰国後近代日本の基礎を築いた先駆者達を讃える」と記されており、一八六三年(文久三年)伊藤博文、井上馨、山尾庸三、他二名と、一八六五年(慶応元年)五代友厚、森有礼、他十七名の名前が刻まれている。前の五名は長州藩の密航者であり、後の十九名は薩摩藩士で、いづれも有名な長崎の貿易商グラバーの援助により留学したものである。

伊藤以下の五人の長州藩士はジャーデン・マセソン社やグラバーの援助で密航しロンドンに到着した。彼等はマセソンの紹介でユニバーシティ・コレッジに入学した。ウィリアムソン教授の知遇を得て伊藤と井上は教授宅に下宿していた

が、下関戦争の危機を知り教授の反対を押しきって渡英後わずか半年あまりで急ぎ帰国し、その後は倒幕運動に奔走した。山尾は残留の三人のリーダーとして勉強を続けた。山尾は一八六六年(慶応二年)ロンドンを去りスコットランドに行き、昼はネイピア造船所で修業し夜はアンダーソン・コレッジ (ストラスクライド大学の前身)で造船学を学んだ。明治維新の成功の報を聞いた後帰国し、のち伊藤博文とともに「工部大学校建設の建議」を提出した。一八八〇年(明治一三年)には工部卿となり我が国工学界の恩人といわれた。

先人の記録を調べると興は尽きない。

(参考資料 北政己著「国際日本を拓いた人々」他)

(相信20号 Sep,1997)



University College London の裏庭にある留学生の碑

[目次へ](#)

Updated on 1st of May, 2000